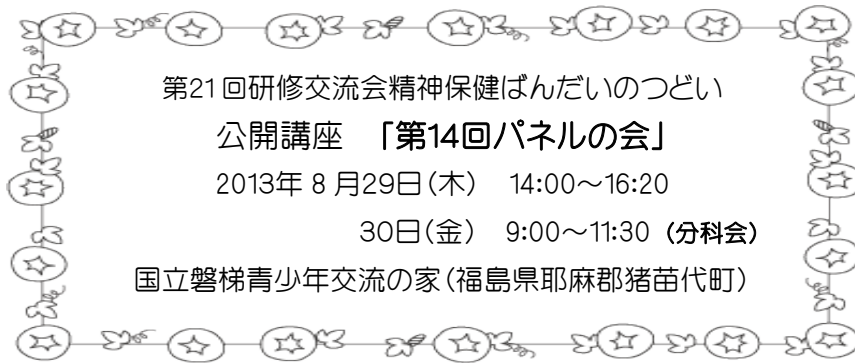


## 「第14回パネルの会」のご報告



『パネルの会』は、毎年、福島県精神障がい者家族会連合会つばさ会「研修交流会精神保健ばんだいのつどい」の公開講座として開催されております。今年は、1日目に分科会、2日目に第14回パネルの会という日程で開催されました。初日はお天気に恵まれ、会場の玄関前からはきらきらと光り輝く猪苗代湖が見渡せました。交流の家に到着された皆様の表情は生き生きとされており、期待に満ち溢れている様子でした。

2日目の『第14回パネルの会』には、約235名という多くの皆様にご来場の下、開催させていただく事ができました。ご来場いただいた皆様、そしてパネルの会開催にあたりご協力いただきましたばんだいのつどい実行員会の皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

では、パネルの会の様子をご報告させていただきます。



《テーマ》

「統合失調症とつきあう –幻聴があっても“はたらける”–」



今年度のパネルの会のテーマは、「統合失調症とつきあう –幻聴があっても“はたらける”–」です。

“はたらく”は、一般就労だけを意味するものではなく、家事や家業の手伝い、作業所での仕事等、その形は様々です。病気と上手につき合いながら、一人ひとりの状況に合った“はたらく”について考えました。

医師、作業所の責任者、当事者のそれぞれのお立場から、“はたらく”についてご講演をいただき、会場から寄せられた質問と共にディスカッションを行いました。

パネルの会会長 丹羽真一先生のご挨拶により、「第14回パネルの会」が開会しました。

初めにご講演いただいたのは、福島県立医科大学神経精神医学講座の松本純弥先生です。

松本先生からは、“はたらく”を妨げる様々な因子（幻聴や妄想、薬の副作用、服薬等）についてお話をいただきました。そして、“はたらく”を支援する薬についてもお話いただくことができました。また、実際に“はたらく”につながった症例をいくつかご紹介いただきました。

先生のお話を通して、“はたらく”につなげるためには、まず現在の状況を整理することから始まると感じました。自分の“はたらく”を思い描けたなら、“はたらく”の妨げになっているものを確認し、それを取り除くため、信頼のおける医療スタッフや福祉関係者、家族などと連携することも大切と思いました。

松本先生は、『自分自身にとっての“はたらく”は何かを考える事が第一歩』とおっしゃられました。



次に郡山社会事業協会あさかの里の副理事長・総括施設長でいらっしゃいます朝生裕之様より実際にはたらいっている方々の様子やはたらいいただく際のポイント等をお話いただきました。

『あさかの里』は、就労に関しての事業所が3つにわかれており、それぞれの業務内容をご紹介いただきました。お話をお聴きし、就労内容や時間など自分自身の状況に合った業務を選択することができるので、それぞれのお力が発揮できると感じました。

また、『あさかの里』の利用者さんに幻聴についてのアンケートを実施した結果について、ご紹介いただくことができました。

幻聴がある方とない方はおよそ半々で、幻聴がある方でも仕事中に聞こえたとは回答された方は3分の1以下でした。アンケートの結果に対して朝生さんは、「職場では作業に集中しているためか服薬によるためかは分からないが、幻聴を感じた方でも「気にしない。」という方が多く、それぞれに対処法を持っている様だ。相談できる方もいらっしゃる様だ。」と分析されました。また「作業所は、単に働くところだったり就労の訓練やお金をもらうためだけの場所ではない。スタッフの支援や仲間(ピア)の力があり、安心感や所属感を得られる場所。」とまとめられました。

当事者のお立場からは、大嶺清治様より“はたらくこと”を含めた体験談をお話しいただきました。

現在、大嶺さんは会津若松市にある『NPO 法人ほっとハウスやすらぎ』に通所し、精力的にお仕事をされていますが、ここに至るまでには多くのご苦勞があったそうです。病に苦しみ入退院を繰り返しながらも、家業の農業を引き継いだり、スーパーでの仕事に就いたり…。

『ほっとハウスやすらぎ』に通所するようになって、初めは思うようにできなかった箱折りができるようになると、次第に他の仕事もこなせるようになったそうです。それはまるで、「暗闇のトンネルで迷っている時に、一条の光が差し込んだ様だった」そうです。

大嶺さんが『ほっとハウスやすらぎ』での仕事のお話をするお姿は、自信に満ち溢れており、仕事の楽しさや充実感、達成感が強く伝わってきました。

大嶺さんは「仕事をさせてもらい、それができるようになり、賃金がいただける。こんな幸せはないと思っています。」とおっしゃられました。そして最後に「働くことの楽しさ、仕事の楽しさというものは、我々、統合失調症の人達にとって、薬と環境と努力によって成り立つものだと、私は思っています。」とまとめられました。

大嶺さんの発表は、会場の皆様の心を掴み拍手喝采が響き渡っていました。

休憩を挟み、第2部がスタートしました。

丹羽真一先生の進行により、パネリストの皆様とのディスカッションが行われ、会場からの質問にお答えしながら会が進められました。

大嶺さんへの「立ち直る時に支えになったものは何ですか?」という質問に対して、「自分自身の治癒力を信じたことです!」という大嶺さんの自信に満ちた声と表情がとても印象的でした。



今回の『第14回パネルの会』開催にあたりましては、多くの皆様に事前アンケートのご協力をいただきました。「はたらく!」について感じることを書いていただきますと、人の役に立てることへの喜びや収入を得る喜び、毎日メリハリのある生活を送れる喜び等、「喜び」につながるご回答も多く見受けられました。

事前アンケートにご協力いただきました皆様、ご来場いただきました皆様、誠にありがとうございました。

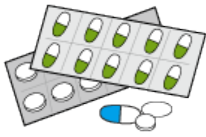




## 分科会 「こころの薬 あなたの疑問に答えます。」



さて、分科会は、昨年大好評でした『薬のお話』です。



前回に引き続き、医療法人落合会東北病院診療部長の和田明先生より、「こころの薬 あなたの疑問に答えます。」の演題でご講演いただきました。



初めに、薬の分類や種類等、その効果や副作用についてお話いただきました。昨年同様、お話しの間合いに会場からのご質問に答えながらの講演でしたが、薬の種類については皆様の関心が高い様子で、ご自分やご家族が飲まれている具体的なお薬の名前を挙げ、飲み合わせや副作用等について熱心に質問される方が多くいらっしゃいました。



皆様のお話をお聞きしますと、何らかの副作用に悩まされる方が多く、本当にご自分に合う薬に出会うまでには、かなりのご苦労があることが伺えました。

治療には服薬は欠かせないものの不眠や振え、不安感等の副作用が生じることもあり、日常生活や就労に影響が出てくることを考えますと、お薬の選択がとても大切だと再認識させられました。

お薬の選択については、種類や量、投与方法、剤型、回数、副作用等の様々な事柄が考えられますが、『何よりも大切な事は、医療者と当事者、家族等の情報交換に加えて、ご自身が納得した上で服用を続けることです。』と先生はおっしゃいました。そのためにも、やはり当事者を取り巻く相互の信頼関係の築きが重要であると感じました。

皆様のご協力により、今回の分科会も大盛況でした。

県外からご参加された方も、「こんなお話を聞きたかったんです！」と、講演後に先生とお話しされているお姿がとても印象的でした。

『パネルの会』は、『医療関係者と精神障がい者、その家族、そして一般市民が、最新の精神医学・医療を学びあい、お互いに情報交換をし、理解を深めるための会』です。

互いの個性を認め合い、共に生きる社会が広がるよう、今後も皆様のご意見をお伺いしながら、より良い『パネルの会』を作っていきたいと思っております。

どうぞ、今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

